

三鷹中央学園



様式6	平成28年度 三鷹中央学園の評価・検証 結果報告	
検証項目	(1) 人間力・社会力の育成 ○他者との適切な関係を構築する力の育成 ○他者と共に自己実現を図っていく力の育成 ○地域や社会等へ貢献する力の育成 ○その他	
目標	①9年間の防災教育、キャリア・アントレプレナーシップ教育を充実させ、地域や社会と共に生きる力を育む。 ②地域の人財を活用した教育活動を推進し、人や地域とのかかわり、知識・技能等をより豊かにする学びを実現する。	
取組	①コミュニティ・スクール委員会及びみたかスクール・コミュニティ・サポートネット等と協働し、「9年間の学園防災教育」の実践を基に、系統性を踏まえ、他の学習との関連性を考慮して、指導計画を整備する。その際、三鷹中央学園版副読本「カンガエル地域防災」を活用するとともに、地域防災活動への参加を推進する。 ②コミュニティ・スクール委員会等と連携し、地域の人財を活用した教育活動の機会を充実させ、協議・協力しながら計画的に実施する。	
成果	課題と改善方策	
①コミュニティ・スクール委員会、みたかスクール・コミュニティ・サポートネット、三鷹市防災課等と連携・協働し、三鷹中央学園版副読本「カンガエル地域防災」を活用して、内容や方法を工夫しながら全学年で防災学習を実施することができた。アンケートでは、防災教育について、児童・生徒の9割以上、保護者の8割以上の肯定的回答を得た。実践を踏まえて9年間の系統性をもたせた学園の防災教育の指導計画を作成した。地域の総合防災訓練では、中学生が防災学習の成果を発揮し、活躍する姿を地域の方に見せることができた。 ②地域の人財を活用した授業について、保護者アンケートの肯定的回答は約9割に上った。各校で多様な学習活動を展開し、児童・生徒の学習を深めたり、定着を図ったりすることができた。	①防災学習について、学習活動は学年の発達段階に応じて定着してきたが、どのような力が付いたか、付けていきたいかについての検討を十分には行っていない。系統性を一層考慮しながら、指導計画を練っていく。また、「生き方・キャリア教育」について、保護者や地域への啓発に取り組み、生きる力を育む視点の共有を図る。 ②「CS活動カレンダー」を作成し、コミュニティ・スクール委員会をはじめ地域の協力者と年間の学習活動について見通しをもつ機会を設定したことで、昨年度よりもスムーズな授業の計画と運営ができた。授業計画が定着してきているので、各校、各学年で、年間計画をさらに練り直していく。	
検証項目	(2) 学校運営について ○小・中一貫教育校の学園組織の活性化 ○小・中一貫教育校の教員間、学校間の交流の円滑化 ○小・中一貫教育校の校務、会議の効率化 ○その他	
目標	①学園運営を組織的に行い、円滑化・効率化・活性化を図りながら、教職員間で学び合う。 ②学園・学校評価の内容を改善し、成果や課題を一層明確化するとともに、保護者や地域への啓発を図る。	
取組	①学園の教育目標の実現に向けて、学園校長会、6委員会(教務、生活指導、交流、研究推進、総合的な学習の時間、情報)、小・中一貫教育コーディネーター連絡会を年間を通じて開催するとともに、校務支援システムを活用して、3校の特性を生かしながら密に連携を図る。特に、三鷹市教育研究協力校として系統的な指導の改善を図るよう連携する。 ②学園の取組についての「見える化」「魅せる化」を推進し、ホームページや学校・学年だよりの活用を図る。そのうえで保護者や児童・生徒の声を反映し改善しやすくなるよう学園・学校評価を実施し、成果や改善策等を積極的に啓発する。	
成果	課題と改善方策	
①年間10回の学園研究会に向けて、3校の小・中一貫教育コーディネーターが会議を開催したり校務支援システムを活用したりして、円滑に効率よく運営することができた。6委員会がそれぞれに学校間の調整を図りながら企画・運営を進めるとともに、相互に連携を図ることができ、活性化を図った。 ②学園の取組について、ホームページや学園だよりだけでなく、学校・学年だより等により、意図的に啓発を図った。コミュニティ・スクール委員会評価担当等とともに、学園・学校評価研修を4回実施し、アンケート項目の改善を図るとともに、成果と課題の視点の明確化につながった。	①三鷹市教育研究協力校としての取組を推進するため、研究運営委員会を立ち上げ、3校で課題の把握や方針の共有を図った。さらに緊密な連携を図れるようにし、より明確に研究の構想を立てるよう検討する。 ②学園の取組の様子は伝えているが、児童・生徒の変容の姿、それを価値付ける成果の可視化について十分に検討して、効果的に伝えることができるよう工夫していく。	

検証項目	(3) 小・中一貫教育校としての教育活動 <input type="checkbox"/> 小・中学校間相互乗り入れ授業 <input type="checkbox"/> 小学校相互、小・中学校間の児童・生徒の交流活動 <input type="checkbox"/> 小・中学校教員の合同授業研究等の学園研究会 <input type="checkbox"/> キャリア教育及びそれに基づく小・中の系統性と連続性を明確にした授業実践、授業改善の状況 <input type="checkbox"/> その他	
目標	9年後の義務教育修了を見据えた「15歳の姿に責任をもつ」教育活動を推進する。そのために ①学園研究会を核として、9年間の一貫したカリキュラムの検証を行う。 ②交流活動の充実を図る。	
取組	①「アクティブ・ラーニング」「カリキュラム・マネジメント」を学園研究のキーワードとし、年間3回の学園研究授業、年間10回の学園研究会を実施して、9年間の系統的な指導を実施する。また、相互乗り入れ授業の充実を図る(小学校教員⇒中1指導、中学校国語科教員・保健体育科教員⇒小6指導)。 ②児童・生徒交流を豊かに展開し、学園生が共に学び合う意識や学園への帰属意識を向上させる。また、保護者・地域と共に学園間の連携を図った活動を実施する。	
	成果 ①学園研究を通じて、小・中学校の教員が学び合い、9年間の学習内容の系統性を踏まえて協議を行い、日常の授業に生かすことができた。年間3回の学園研究授業を研究構想図に基づきながら授業改善の視点を共有して計画し、協議を深めた。研究授業を公開し、保護者や地域の方の理解・啓発の機会とすることができた。中学校からの乗り入れ授業時数を増加させ、児童の学習意欲の向上等につながった。 ②保護者アンケートでは、交流について約8割の肯定的回答を得た。小・小交流では、自然教室の資料やプログラムの共通化、三小・七小の混合班での活動の実施等により、第6学年児童の意識が高まり、アンケートでは9割を超える児童が交流について肯定的に回答している。小・中のあいさつ運動、児童・生徒代表者会議も実施方法を改善し、より学園生活につながりやすいように工夫した。	課題と改善方策 ①3回の研究授業の成果や課題の検証、児童・生徒及び教員のアンケート結果の分析等により、さらに主体的・対話的で深い学びを表現できるように研究計画を立てる。また、3校の全教員による教科等部会を立ち上げ、教科等の特性に応じて研究主題に係る学習技能や資質・能力の系統化を図る。 ②交流活動の実施時期については、学習成果の交流による効果も期待して、年度の後半に集中しがちであり、アンケートの実施時期とのずれが生じるため、成果の検証ができるようにアンケートの実施方法を工夫していく。一部の学年の交流活動への直接の支援や、交流する学習内容の充実等に地域の協力を得た。さらに保護者・地域との連携を図り、活動の改善や理解・啓発につなげる。
検証項目	(4) 児童・生徒の学力・健全育成 <input type="checkbox"/> 児童・生徒の学習意欲 <input type="checkbox"/> 各学年での児童・生徒の学習内容の定着状況(習得、活用、探究) <input type="checkbox"/> 小学校と中学校の評価の一貫性 <input type="checkbox"/> 不登校、学校不適応等に関わる児童・生徒の指導・支援	
目標	学力 「三鷹中央学園パワーアップアクションプラン・すすんで学ぶ人」の取組内容を基に、学校・家庭・地域の実践内容を具体的に展開し、学習習慣の改善を図り、確かな学力を育む。 健全 地域・保護者と連携し、各校の「学校いじめ防止基本方針」に基づいた取組を着実に実施して、いじめを防止する。また、学園生活指導重点目標の実現を図る。	
取組	学力 ①「三鷹中央学園パワーアップアクションプラン」を「三鷹『学び』のスタンダード(学校版及び家庭版)」とともに活用し、児童・生徒の実態を踏まえて項目を計画的に実践する。また、家庭向けのアンケートや地域住民による協議の実施により、一層効果的に実践を推進する。 ②学力(集中力・読解力・表現力)の育成を図るよう、年間を通した「朝読書」をはじめ、系統的・継続的な読書活動や「学園推進図書」の活用に取り組み、読書習慣につなげる。 健全 ①学園生・保護者・地域が連携し、継続的なあいさつ指導に取り組み、「あいさつは、自分から。返事は、『はい。』」を徹底する。また、自己肯定感、自己有用感につながる声掛け等の取組を工夫する。 ②「ネットいじめ」を含む「いじめ問題」の根絶に向けて、学園の組織を生かした生活指導体制を整え、3校が連携を図るとともに、児童・生徒の主体的な取組を実施する。また、保護者との共通理解を図り、コミュニティ・スクール委員会等と課題や改善策について協議し、より有効に取組を展開できるようにする。	
	成果 学力 ①児童・生徒アンケートの「学校の授業がよくわかる」について、小学校で約9割、中学校で約8割の肯定的回答を得た。学園研究において、昨年度までの言語活動の工夫を生かしながら学習方法を工夫し、魅力ある授業づくりに努めてきた成果であると考え。 ②保護者アンケートでは、読書についての肯定的回答が昨年度より向上している。「わからない」という回答の減少も見られた。読書週間に「学園推薦図書」を活用した取組を3校で実施したり、朝読書を継続したりして、読書機会の確保につながっている。 健全育成 ①学園生活指導重点目標「あいさつは、自分から。返事は、『はい。』」の指導に継続して取り組んだ。約9割の児童・生徒が、家であいさつをしていることについて肯定的に回答している。 ②「ネットいじめ」防止にもつなげるように、SNSルールについて、学校で指導するとともに、学園の委員会が連携し、児童・生徒代表者会議において話題にして取り組んだ。	課題と改善方策 学力 ①家庭学習の指導について、保護者アンケートでは、3校とも他の項目に比べて否定的な回答が多かった。学校での指導内容を検討したうえで、保護者に明確に示すとともに、家庭での学習内容に関する声掛けや学習環境づくりの重要性を啓発し、学校と家庭との連携を図っていく。 ②中学生の読書時間の確保に向けて、生活時間全体の改善を図る。また、学園推薦図書の一層の充実等により、適切な読書案内を行っていく。 健全育成 ①地域でのあいさつについては、家庭でのあいさつに比べて、児童・生徒の自己評価が低い。地域と連携して、防災学習等の内容と関連付け、あいさつの大切さを指導するとともに、あいさつの機会をもてるように努める。 ②いじめ防止に向けて、児童・生徒の主体的な取組を継続し、内容の工夫と発信に努めていく。いじめにつながる要因について、児童・生徒、家庭、地域等と共に考え、共に行動する機会をもつ。

検証項目	(5) コミュニティ・スクールの運営 <input type="radio"/> コミュニティ・スクール委員会の組織・運営 <input type="radio"/> 保護者、地域住民の学校運営への参画の状況 <input type="radio"/> 学校と保護者、地域住民との連携・交流 <input type="radio"/> その他	
目標	コミュニティ・スクール委員会の組織を活用し、連携しながら、学校、保護者、地域が一体となった取組を推進し、協議と支援の充実を図り、目指す学園生像の実現に努める。	
取組	①役員会(正副会長と3校長)が中心となって、組織を円滑に運営することができるよう、役員会を必要に応じて開催する。事務連絡は電子メールを活用し、積極的に情報の共有を図る。 ②教員、保護者、地域住民による、学園とコミュニティ・スクール委員会との合同研修会を実施し、学園の取組への理解と改善を図り、スケジュール感をもって協働化を推進する。	
成果		課題と改善方策
①役員会を適時に開催するとともに、コーディネーターに相談しながら、円滑な運営に努めた。役員が各担当と連携を図り、委員会全体で情報を共有するようにした。各担当リーダーが取組の推進に努め、活動の充実につながっている。委員会の円滑な運営により、保護者や地域住民が学園・学校の取組に参加・参画しやすい状況をつくり、教育活動の充実につながっている。 ②学園とコミュニティ・スクール委員会との合同研修会に、みたかスクール・コミュニティ・サポートネットや学習ボランティア事務局等、参加者の拡大を行った。CSカレンダーの作成により、連携した取組のスケジュールについて具体的に検討することができた。		①時間的な制約の中で、役員会、委員会とも十分な議論ができないこともある。内容を精選し、情報共有の仕組の改善をさらに検討して、活動内容の一層の充実を図っていく。 ②「パワーアップアクションプラン」の活用についてコミュニティ・スクール委員会と協議し、継続的かつ具体的に学校から情報を発信する。目指す学園生像の実現に向けて、学校・子ども・家庭・地域がそれぞれに取組を実施のうえで、それぞれの立場から検証する。

平成28年度 三鷹中央学園の評価・検証結果のまとめ

(1) から (5) の検証 結果を踏まえて	1 「小中一貫教育」及び「コミュニティ・スクール」の取組において特によい成果が得られたこと <input type="radio"/> 学園研究において、3校が同じ観点で授業の構想を立て、小・中学校の系統性を踏まえて検討することにより、日常の授業改善につなげたこと。 <input type="radio"/> 地域人財活用を推進し、学習活動の多様化を図り、対話的で深い学びにつなげたり、基礎・基本の定着につなげたりして、学習効果を上げたこと。 <input type="radio"/> 担当制が定着しつつあり、委員が委員会や学校の取組内容全般について、協議や支援をすることができるようになってきて、活動が充実していること。
	2 今年度に明らかになった課題のうち、特に次年度の重点とすること <input type="radio"/> 学園3校の全教員が協力して研究活動を行い、授業を改善している。さらに学習指導要領の改訂等の動向を見ながら、小・中学校の9年間を見通して主体的・対話的で深い学びを実現できるような指導計画を立てることが求められる。児童・生徒が、学習が分かる、自分のよさが生かされるという感覚をもてるようにしていきたい。 <input type="radio"/> いじめ防止に向けた取組を各校で推進している。取組の計画を見直すにあたり、複数の視点からいじめにつながる要因や対応するために必要な力など、課題をより丁寧にとらえることができるとよい。また、学校内の生活はもちろん、学校外での生活の課題もとらえ、児童・生徒だけでなく、学校、家庭、地域が課題意識をもつことができることよい。
	3 「2」の重点課題を解決するための改善策 <input type="radio"/> 各教科等において、段階的、効果的に学ぶ力を育ていくための授業改善のポイントを研究活動を通して資料化し、活用できるようにする。また、授業と家庭学習とのつながりを明確にするように、家庭への啓発を行いながら取り組む。 <input type="radio"/> 「自分も相手も大切に」することができるように、様々な視点で課題をとらえ、いじめ防止に向けた児童・生徒の主体的な取組を中心とした年間指導計画を充実させ、学園、家庭、地域が課題や行動目標を共有できるよう、情報発信を行う。